

カリキュラム・デザイン

東京都台東区立東泉小学校長 佐久間 茂和

本当に逆風か

全個連は逆風だと言う人がいる。確かに、世は系統主義の流れになっていて、今にも百年前の教育に戻って、読み書きそろばんが主流になるような、あるいはもっとさかのぼって、論語の朗読が復活するような勢いがある。しかし、見よ日本の学校を、国の方針を。生活科、総合的な学習の時間、少人数指導、TT、パソコンの導入、マスタリーラーニング、習熟度別学習、コース別学習、自由進度学習等々、皆私たち全個連が推進したり、実践を積み重ねてきたものではないか。本当に逆風なのだろうか、私たちは何を開いてきたのだろうか、もう一度振り返ってみたい。

何を開いてきたか

まず何を開いてきたかである。私がオープンスクールに出会った時に「オープン」でなければいけない、「閉鎖性を開く」という理念が良く理解できたのは、最初に赴任した学校が当初とても「クローズド」だったからである。若かった私たちや他の若い教師が「閉鎖性かげん」にがまんできずに反乱を起こし、自主的に勉強会を立ち上げた様な学校であった。学年の協力とは名ばかりで、学級王国が幅をきかせていたのである。このような学校であるから、「教師主導である」「画一的である」「学級王国である」「十年一日の如しである」「教師同士の研修や切磋琢磨がない」等々、いかに学校が閉鎖的であるかが見えたのである。この時の経験がとて役にたつて「オープン」「開く」といったときに、すぐに閉鎖性を思い浮かべることができて、私の原点になっている。これらの閉鎖性との戦いがまず第一である。

開かれた学校という時に地域に開かれた学校を指すことが多いようだが、これは間違いであろう。教室・教師・学年学級・時間・教材・教科・一斉画一授業・情報・地域と様々な壁を開いてきたのである。

もう一つ開いてきたものがある。それは、私たちが「開くべく閉鎖性」は、実は私たち自身の中に巣くっているものだという事である。長

い間引き継がれてきた教師の「文化」の中に閉鎖性があり、それと闘う私たちは、実は自分自身との闘いを強いられているということである。倒すべき相手がいてこれと闘うのではなく、自分自身の中にもある閉鎖的な部分との戦いでもある。

どのように開いてきたか

次にどのように開いてきたかである。学校を開く実践が拡がりを見せたもう一つの理由は、方向が明確だったからである。方法がある程度示されていて、しかも、それでいて実践段階の工夫の余地があり、実践者の力量や環境などによって工夫して実践できたのも理由の一つである。方向の一つとして、「開く」がある。閉鎖性を「こわす＝開く＝オープン」するのである。

いくつかの学校が始めた初期の実践が全国的に拡大して行ったのは、カリキュラム改革という考え方であろう。従来の教育改革運動や教育実践と、「オープン教育」あるいは「個別化・個性化教育」が、決定的に違うのは、個人・学級学年レベルではなく、学校レベルでの実践が中心だからである。基本的に、学校レベル・学校単位での実践が基になっている改革は今までなかったし、あっても私立学校へと収斂していき、全国規模で広がることはなかったのである。

これから開くもの

個性化教育は、オープン教育は、すでに日本の学校の基盤として定着してきている。

私は、この教育のキーワードを「ロマン・スタッフ・カリキュラム」としてきた。ロマンの時代の創世期、スタッフの時代の拡大期が終わり、今は、カリキュラムの時代の充実期と言えるであろう。カリキュラムをどう構成するか、成長するカリキュラムはどのように構築できるのか、カリキュラム・デザインが求められているのである。私たちが求めている子ども中心の学校づくりには終わりはない。逆風なんて言っている暇はないのである。

さあ、子どもに向き合おう、実践をしよう、カリキュラムを構築しようではないか。

各地の研究発表会から

○岡山県久世町立遷喬小学校 (11月12日)

テーマ「子どもたちとつくりあげる授業」

2年ごとに、研究の成果を発表されている遷喬小学校の公開が、今年も秋色に染まったことなく懐かしさを感じさせる、オープンスクールで開催された。

以前私自身、1週間国内派遣として遷喬小にお世話になり、総合的な学習の成立の過程を追っていく貴重な経験をさせていただいた。先生方は常に子どもたちの姿に寄り添い、研修は子どもたちの動き・思い・変容に終始一貫されていた。先生方は教師の思惑をこえた子どもたちの思わぬ動きに大喜びし、より子どもの思いの実現にむかって話を弾ませていた。そこに貫かれているのは、活動の方向を、学年でたてた目ざす柱（例えば老人の人に直接相手の必要とする事をきく・相手の立場にたつ）に持ち、常に柱に戻ることであった。そしてその視点で研修会も進められ、話し合いの視点がはっきりしていた。なによりも先生方が子どもの姿をもとに楽しそうに話されていたのがとても印象的だった。その精神はきちんと受け継がれている。なぜならば今回の研究テーマが「子どもたちとつくりあげる授業」となっているからだ。同じスタンスで取り組んでいけている底力がすごい。今回も子どもたち・先生はあのオープンスペースを生かして、学級学年を越えより一層に地域やほかの世界との交流も盛んに、新しい単元開発に取り組んでいた。今頃は職員室の隣の畳の部屋でまた次の取り組みについて、奈須先生曰く「相談しながら納得づくで」先生方の作戦が練られていることだと思う。また次回の公開発表が楽しみである。

当日の内容は以下の通り

- ・1年生 生活科
「だれにもまけないあそびの金メダリストになろう」
- ・2年生 国語科
「ドラエモンのみみつどうぐにチャレンジ」
- ・3年生 社会科
「調べてガッテン大型店に負けないお店パワーをさぐれ」
- ・4年生 総合学習
「トリビアの泉 in 久世」

- ・5年生 社会科
「久世町の集材材について調べよう」
- ・6年生 総合学習
「ヒロシマから現在そして未来」
- ・障害児学級
「買い物ごっこをしよう」 (文責 加藤久美子)

○千葉県館山市立北条小学校 (10月29日)

テーマ「生きることに有能な子どもを育てる」

「新しいコミュニティ形成者の育成」をめざして、10月29日に研究会が催された。戦後、「北条プラン」のもとに「統合学習」を旗印にして、新しい学校のあり方を求めてきている学校である。また、わが国で初めてオープン・スペースをもった学校としても知られている。

「オープン学習」は、学習内容や方法などに自由性を最も高くもたせた「統合学習」と相互に係りながら、「生きることに有能な子どもの育成」をめざす学習である。さらに、個別学習と共同学習の調和を図ることによって、「真正な学び」の実現を図ろうとする。

伝説のある「北条プラン」を守りつつ「異質な者からなる新しいコミュニティ形成者の育成」をめざすことによって、21世紀にふさわしい学校のあり方を追求しようとする真摯な努力を実感した次第である。楽しい一日であった。

尚、国立教育研究所以来の旧知の友、早稲田大学の佐古順彦先生、野嶋栄一郎先生がご指導されていることを知り、喜びが一層大きかった。佐古先生とは帰りの列車で、飲み交わしながら、歓談して帰路に着いた。人生至福のひとつときであった。(文責 加藤幸次)

生きることに有能であることは

かつての「有能な人」とは、組織の一員として、集団の意に沿う形で、集団に寄与できる人間を指していました。私たちが考える「生きることに有能」であることは、こういった既存の考え方とは異なります。

「生きることに有能な子ども」とは、異なる価値観と調和し、創造的な活動を通して自己と他者を高めることができる子どもです。

コミュニティの成員が異質であることを前提に、それらのインタラクション(相互作用)によって新たな価値を創造することが「生きることに有能」と考えたのです。

研究紀要より

○愛知県東浦町立緒川小学校 (11月26日)

テーマ「学びあふれる学校の創造をめざして」

今年で17回目になるオープン・スクール実践研究会は、11月26日(金)に行われた。ここで、「えっ?」と思われるあなたは、かなりの全個連通。例年1月下旬に行われていた緒川小学校の実践研究会は、本年は公開研究会の集中する秋の一日に行われたのである。

「おめでとうございます」と通りかかられた宮崎一巳校長先生にお祝い(?)を申し上げると、「参加者数が伸びず心配をしています」との言葉であった。確かに二千人以上の参加者を集めた過去の研究会のような「ごった返し」はないものの、むしろ日々子どもたちの実践をじっくりと参観させて頂くには適当な規模であり、参観者への最高のサービスではないかとさえ感じられた。

当日は、「理論探究の学習」(教科)と「生き方探究の学習」(生活科・総合学習「生きる」)の実践を公開する60分間の学習公開①と、「はげみ学習」の実践を公開する75分間の学習公開②に続いて、全体会・昼食をはさんで、加藤幸次先生の講演「オープン・スクールの成果—緒川小学校の為に遂げてきたもの—」、さらに4つの分科会とそれぞれの二講演と実に充実したプログラムが用意されていた。

学習公開①の活動の一例を挙げよう。

3年生(ぼくたちわたしたちの秋物語)では、学年芸術祭に向けた横断的な表現活動(国語、音楽、図画工作、体育)の姿が見られた。

4年生(環境にやさしい活動をしよう)では、4月からの子どもの関心の持続が感じられるグループ別の環境保全に取り組んでいた。



5年2組の「守りたい、支えたい、助け合いたい、みんなの大切ないのち」は、保護者と子どもが「1リットルの涙」に向かい合い、人の言葉を正面から受け止める授業であった。

60分の学習公開①であったが、やはりすべての教室を回することはできなかった。多くの教室で足を止めたくなる実践が多かったためである。(文責 久野弘幸)

○千葉県八千代市立萱田小学校 (11月26日)

テーマ「一人一人が学ぶ楽しさを実感できる
学びの場をめざして」

萱田小学校は、平成4年度開校以来、一貫して「心のつながりを深める個性化教育の推進」を研究主題に実践研究をすすめている。第11回目となる公開研究会では、14年度より3カ年計画で取り組んできた研究成果が発表された。個性を生かす教育の推進は、単一教科ではなく教育活動全般で追究するという考えのもと、当日は、算数、生活科、理科、社会、総合的な学習の時間の授業公開と「たがやし学習」「うたごえ集会」のビデオ上映による実践紹介が行われた。

3年生の総合「ディスカバー八千代」では、市内12カ所の公共施設の体験報告「見ている人が(施設を)利用したくなるような報告会にしよう」の活動が展開された。移動間仕切りで暗室をつくりプラネタリウムを再現して発表するグループや、総合体育館の内部模型をつかって施設紹介をしたり、福祉センターの車椅子を借りてきて体験コーナーを設けるグループなど、各施設の内容の特色を捉えた様々な表現による報告が行われていた。また報告後には見た人の感想や質問を求め、相互理解を深める場面もあった。

5年生の総合「スマイル5フェスティバルを開こう」では、学年文化祭にむけて各学級で「よさこい祭り」の踊り、人形劇、和太鼓、パン作り、お化け屋敷、の完成を目指した追究活動が行われた。子どもたちが(「師匠」と呼んでい)る)専門家講師の技術指導を受けることを通して、文化・芸能活動の「本物」に関わる楽しさや厳しさを味わい、自分たちの活動を見つめ直し、追究をより深めようとする場面がみられた。なお、萱田小は、オープンスペース、飼育舎、

栽培園などの施設を有効活用し、個性化教育の推進を目指した研究実績と、情操豊かな児童の育成、地域に開かれた学校づくりの功績が認められ、平成16年度八千代市教育功労者・団体表彰を受賞した。(文責 佐野亮子)

〇千葉県千葉市立打瀬小学校

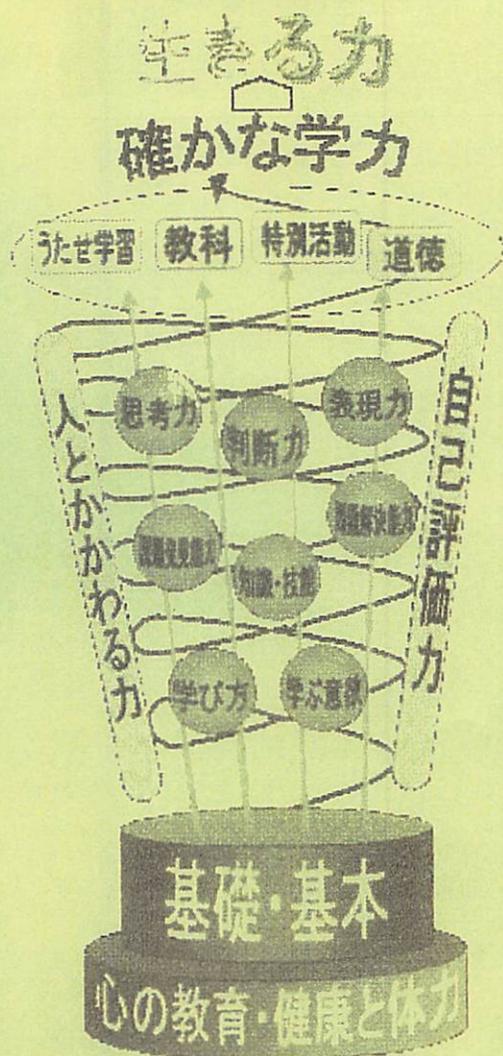
テーマ「確かな学力を育む指導と評価のあり方
～人とかかわる力と自己評価力の育み
を中心として～」

各学年、各学習とも「子どもにとって意味があり、教師にとって価値のある活動」をめざして単元構成が工夫され、子どもたちの学習意欲を高めるための研究がされていて、見ごたえのある授業であった。

うたせ学習の実践である6学年の「卒業研究」では、各自が立てたテーマの追求活動を行っていた。『ペットボトルロケットを作りたい』『新聞記者になるために必要なことを学びたい』などの個人研究である。どの子どもも自分の取り組みたいことがはっきりとして、学習の進め方が身についており、とても深まりのある内容の研究で感心した。教師が個々の見取りを適切に行い、指導に生かすための「個人カルテ」作成しており、ふさわしい助言や支援をしている結果が子どもたちの姿に表れていた。学習の中で行う「個人面談」も効果的であった。

シンポジウムの中で立教大学の奈須正裕先生が、『授業を創っていくためには、まず子どもが中心にあり、実態に即して、「つけたい力」を明らかにすることが大切である。』『単元を構成する際には、内容研究、分析をしっかりと行っていくことが重要である。』など、話されていたことが心に残った。子どもの可能性、教師の創造性の素晴らしさを感じる発表会であった。(文責 渡辺佳代子)

研究全体構想図



(打瀬小HPより)

▼平成16年度宿泊研修会▼

年末の声を聞くと、恒例となった箱根における宿泊研修会が近づいてきます。

本年度は12月26日(日)と27日(月)の両日にわたって行われます。昼の研修もさることながら、夜の教育談議も楽しみです。皆様の参加をお待ちしています。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

〒115-0031 東京都台東区千束4-29-5-1005
tel/fax 03-3871-8789 庶務部長 高瀬雄二
e-mail yujitaro@yahoo.co.jp

<全国個性化教育連盟のホームページ>

<http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html>

全国個性化教育研究連盟会報 第71号

平成16年12月4日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 松浦 盛人